

昭和40年4月

秋田県文化財調査報告書第5集

脇本埋没家屋第一次調査概報

秋田県教育委員会



序

昭和39年9月から10月にかけて全国でも極めてめずらしい遺跡として注目の的であった男鹿市脇本富小谷地所在の埋蔵家屋の緊急発掘調査を国の助成のもとに行ないまして一応の成果をおさめ、その経過をこの報告書にまとめた次第であります。

この遺跡は、昭和34年4月、当該地の耕地整理のさい発見されたもので、須恵器、砥石などが出土し、また、用水路に屋根板様のものが露出しておりました。このたびの調査は、遺跡が用水路にかかっていることから緊急的に行ないましたが、当該遺跡が推定のとおり平安期のもので、古代民家建築上貴重な資料を得ることができました。

この報告書は、第一次的調査の概要であり、未だ最終的な結論には達しておりませんがこの資料が研究者の参考になれば幸いと存じます。

なお、執筆された東京大学斎藤忠博士、京都大学福山敏男博士、同永井規男、秋田県文化財専門委員、赤尾孝太郎、橋本光正、加藤君雄、奈良修介の諸氏並びに木簡の赤外線撮影に当られた秋田県警察本部山谷和男氏、木簡の鑑定に当たられた東京大学竹内理三博士、京都大学赤松俊秀博士、また発掘作業に協力された外飯森部落の各位、多大の御援助を頂いた男鹿市教育委員会及び発掘関係者御一同に終りに深く感謝いたします。

昭和40年2月末日

秋田県教育庁社会教育課長

石川哲三

序 文

寒風山の麓に、古代の家屋が埋没されていることが発見されたのは、昭和34年の耕地整理のときであった。従来、古代住居跡は、各地に数多く検出されているが、これらは、殆んど床面のみの痕跡をとどめるに過ぎない。本遺跡のように、家屋そのものが保存され、或いは遺材の多くがそのまま残存することは稀有の例であり、この顕現が古代の生活の実態を明かにする上にもきわめて意義深いものであることはいうまでもない。地元関係の学者も、この調査の実現に熱心であったが、機熟さず、荏苒時日の経過とともに、貴重な地下遺構も次第に荒廃し、特に用水掘の中に露呈していた屋根らしい一部は洗濯用の足場として利用されている状況であった。

今回、秋田県教育委員会が調査を計画し、幸に男鹿市の協力のもとに、国庫の補助により、この実現を見ることができた。調査は、昭和39年9月に、県文化財専門委員奈良修介氏を中心として行われ、京都大学建築学教室の福山敏男博士及び永井規男氏の指導協力があつた。私も、数日現地に滞在し、遺構の調査に力を合せるとともに、つぶさに調査員諸氏の労苦に接することができた。期間中、悪天候の日が多く、特に豪雨のこの発掘現場には、またたく間に水がたまり、プールの如き状況を呈することもあつたが、調査員諸氏は、雨中にもかかわらず自ら進んで排水作業も行い、泥濘にまみれながら苦闘をつづけ、この熱意に深く感銘されるものがあつた。

この調査の成果が、いち早く関係者の努力によってまとめられ、上梓の運びに至ったことは慶賀に堪えない。成果の内容は本書に詳かに記されているが、脇本の地帯に、古代の集落があり、しかも比較的高度の生活内容を有しており、古代秋田城と何等かの連繋のあることも考慮されるに至った。このことは、本遺跡が、単に考古学、建築史上に価値あるばかりでなく東北古代史の解明の上にも直接に寄与することも知るのであり、今回の調査の意義のまことに大なるものがある。

調査関係者各位の熱意に心からの敬意を表して、序文の責を果すことにしたい。

齊 藤 忠

脇本埋没家屋第一次調査概報目次

序	石川 哲三
序文	斎藤 忠
1. 発掘調査に至る経過	奈良 修介… 1
2. 発掘調査	2
3. 遺跡	磯村 朝次郎… 4
4. 飯森発掘地の地層について	赤尾 孝太郎… 5
5. 家屋遺構	福山 敏男… 8 永井 規男
6. 出土遺物	…16
(1) 須恵器	鍋倉 勝夫…20
(2) 墨書須恵器	鍋倉 勝夫…22
(3) 木器	富樫 泰時…23
(4) 植 物	加藤 君雄…26
(5) 獸骨	橋本 光正…27
(6) 其の他の出土品	富樫 泰時…28
(7) 井戸	豊島 昂富 樫 泰時…29
7. 結 び	奈良 修介…30
後 記	30

挿 図 目 次

第1図	飯森五万分一地形図(国土地理院)	3
第2図	発掘地域断面図 地層断面図, 粘土層組成表	(富樫図) 6
第2図2	貝 写 真	(赤尾) 7
第3図	家 屋 遺 構	(永井図) 10
第4図	断 面 図 IV区南北断面図・IV区東西断面図	(永井図) 11
第5図	断 面 図 VI区部分図	(永井図) 12
第6図	須 恵 器 (1)	(富樫図) 17
第7図	(2)	(富樫図) 18
第8図	(3)	(富樫図) 19
第9図	墨 書 須 恵 器	(鍋倉図) 21
第10図	木 器 (1)	(富樫・鍋倉図) 23
第11図	(2)	(富樫・鍋倉図) 24
第12図	植 物	(加藤) 26
第13図	井 戸 実 測 図	(豊島、富樫図) 29

図 版 目 次

第1図版	遠望、木器、土器出土状態写真	(富樫) 31
第2図版	家屋遺構遺材写真	(永井) 32
第3図版	木 器 写 真	(富樫) 33
第4図版	船型木器、植物	(富樫) 34
第5図版	木 簡、写 真	(山谷) 35

1. 発掘調査に至る経過

昭和34年2月、男鹿市脇本富永小谷地において耕地整理の為、排水路開さく工事中、多数の木材や陶器等が発見された。この知らせが、同村加藤監悦氏によって磯村朝次郎に連絡され、磯村は小玉昌友と共に現場を訪れ、埋没家屋の一部であることを確認し、これらの一帯の地域を調査した。この遺跡は大倉口大排水路の東西両岸にその一端を跨らわし、巾2 m 深さ1.4 m の水路中にも2本の杭が見られ、東岸側面には長さ8 m に亘って板材の端がならんであらわれ軒先のように見えた。この水路中から採集した陶器は小玉昌友が保管したがその中に縁軸の陶片、木製の彫り込のある田下駄 須恵 器の墨書 田 広 大 ト 十 ネ等があった。

昭和36年4月、磯村の連絡により、県文化財専門委員奈良修介、県社会教育課藤田幸雄は男鹿市教育委員会と共に現地を視察し対策を研究すると共に、7月には文部技官斎藤忠博士、8月に京都大学教授福山敏男博士の現場視察を頂き、その結果平安時代の埋没家屋であることが次第に想定されるに至り、県、市は現場の保存につとめて来た。磯村は更にこの遺跡周辺の調査を続け、脇本駅附近の野田及び浦田小坪尻においても杉割板の出土を知り昭和36年6月秋田考古学誌上に「脇本飯森家屋埋没遺跡調査概報」を発表した。

(奈良修介)

2. 発掘調査

調査員の構成

1. 発掘調査員

イ 発掘調査顧問	東京大学・文学博士	斎藤 忠
ロ 発掘調査員	総括責任者	奈良修介
	秋田県文化財専門委員	福山敏男
	京都大学教授工学博士	永井規男
	京都大学助手	磯村朝次郎
	男鹿市船川中学校教諭	富樫泰時
	敬愛学園高校教諭	鍋倉勝夫
	敬愛学園高校教諭	

ハ	専門調査委員	測 量	県立金足農業高校教諭	幸 野 敏 夫
		文 書	秋田県文化財専門委員	半 田 市太郎
		"	男鹿市船越中学校教諭	小 玉 昌 友
		植 物	秋田県文化財専門委員	加 藤 君 雄
		"	男鹿市船川第一小学校教諭	永 田 耕 造
		地 質	秋田県文化財専門委員	赤 尾 孝太郎

2. 発掘補助員及び作業員

イ	発掘補助員		秋田大学学生	永 瀬 福 男
			ほかに、秋田大学学生、ならびに金足農業高校敬愛学園高校生徒。	
ロ		測 量	金足農業高校農林土木科生徒3名	
ハ		発掘作業員	5名	
ニ	発掘事務局	顧 問	県教育委員会教育長	伊 藤 忠 二
		"	男鹿市教育委員会教育長	角 崎 不二雄
		局 長	県教育庁社会教育課長	石 川 哲 三
		発掘経理	県教育庁社会教育課庶務係長	北 村 精 治
		発掘事務	県教育庁文化係長	加賀谷 辰 雄
		"	県教育庁社会教育主事	吉 川 欣 一
		"	"	佐々木 清
		"	同 主 事	山 口 哲 男
		"	男鹿市教委社会教育主事	薄 田 勇 治
		"	男鹿市脇本支所長	今 泉 市 助
		"	男鹿市脇本公民館主事	児 玉 三 郎

小谷地遺跡附近地形図



3. 遺

跡

飯森遺跡は国鉄船川線脇本駅を下車し寒風山パノラマラインへ通ずる舗装道路を北へ徒歩約10分、男鹿市脇本富永にある。

この辺一帯は数年前、耕地整理が行なわれた、豊かな水田地帯を形成している。

遺跡はこの水田を貫いて琴浜村弘戸へ至る農道と大倉口大排水路の直交する付近の水田下に埋蔵され、現水田面は海拔12.8 mを測り、東方の八郎潟湖岸へ緩傾斜する。

遺跡地の北西は鮮新世後期鮭川層、第四紀潟西層からなる低位丘陵で、この上に噴出したコニトロイデ式火山である寒風山（354.7 m）がそびえている。

寒風山東麓に展開する段丘はいくつかの侵蝕谷をつくり末端で断崖をなして低地に移るが、断崖にしばしば土砂崩れの現象をみる。

石川、樽沢、浦田、飯森、大倉の各集落は古くからこれら侵蝕谷を利用し、これを堰とめて溜池をつくり灌漑に利用してきた。

また遺跡地の西40 mの地点に孤立し延録年間安藤修季一族の居館と伝えるところがあり、飯森部落はこの縁辺に立地する。

南は生鼻岬を起点とし海岸に沿って放射状にのびる中細粘砂からなる砂丘がみとめられる。

飯森周辺の地形は概略以上の如きものであるが、この地域は本遺跡のみならず各種の考古学的資料の存在する点で注目に値する。

ちなみに本遺跡から半径1 kmの範囲についてみると、北西の浦田宗泉寺内に貞和2年2月在銘の名号板碑、マンガラ堂の鎌倉末期と推定される五輪塔及び板碑群が存在する。

また、西南大倉の丘陵、長者森において天文15年、同20年銘を有する金銅製経筒の出土があり、さらに続縄文土器出土地を2カ所に指摘することができる。

一方、南東部の砂丘上に立地する飯村からは昭和8年、道路開さく中に蕨手刀の出土があり、この砂丘一帯は縄文後期から土師、須恵期に至る遺物の包含地域であることが知られている。（磯村朝次郎）

4. 小谷地発掘地の地層について

男鹿市脇本 飯 森 所在、埋蔵家屋発掘地域の地層は、断面図（第2図）に示される通りであって、沖積層湖底堆積物たる砂、粘土、有機質等の含まれる互層である。

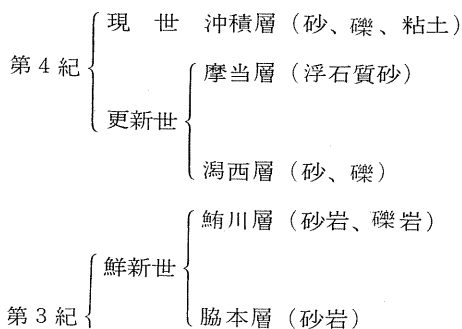
西側断面中、層序の乱れの少ない部分から採られた試料（金足農高奈良委員採取）は、上から表土（a）（耕作土）、表土（b）、第2層、第3層、第4層、第5層、第6層、の層に分けられ、各層の厚さは15—20cmであるが、最下部の第6層については、その厚さは不明である。この試料について行った沈降試験等の結果は粘土層組成表の通りである。

表中組成欄の砂は0・05mm以上のもの、泥及粘土は0・05mm以下のものを言い極微粒は1ミクロン以下のものを言う。粒子の大きさは顕微鏡下、観測し、%は試験管内に沈積した厚さから計算したものである。

この表に見るように、いずれの層にも植物質が含まれているが第4、第5層が最も多い特に第5層はいわゆるヘドロ層で多くの植物質を含み、コロイド状であって水がきれない。

植物は顕微鏡下では葭芦などの茎葉の繊維が見られる。第6層の砂は色が淡色で粘り気なくサラサラし、顕微鏡下でこれを見ると各砂粒は多孔質で浮石質の砂であることがわかる。このことは特に注目すべき点である。

従来、潟西の地層は地質学上、次のような層序になっていることが一般に認められている。

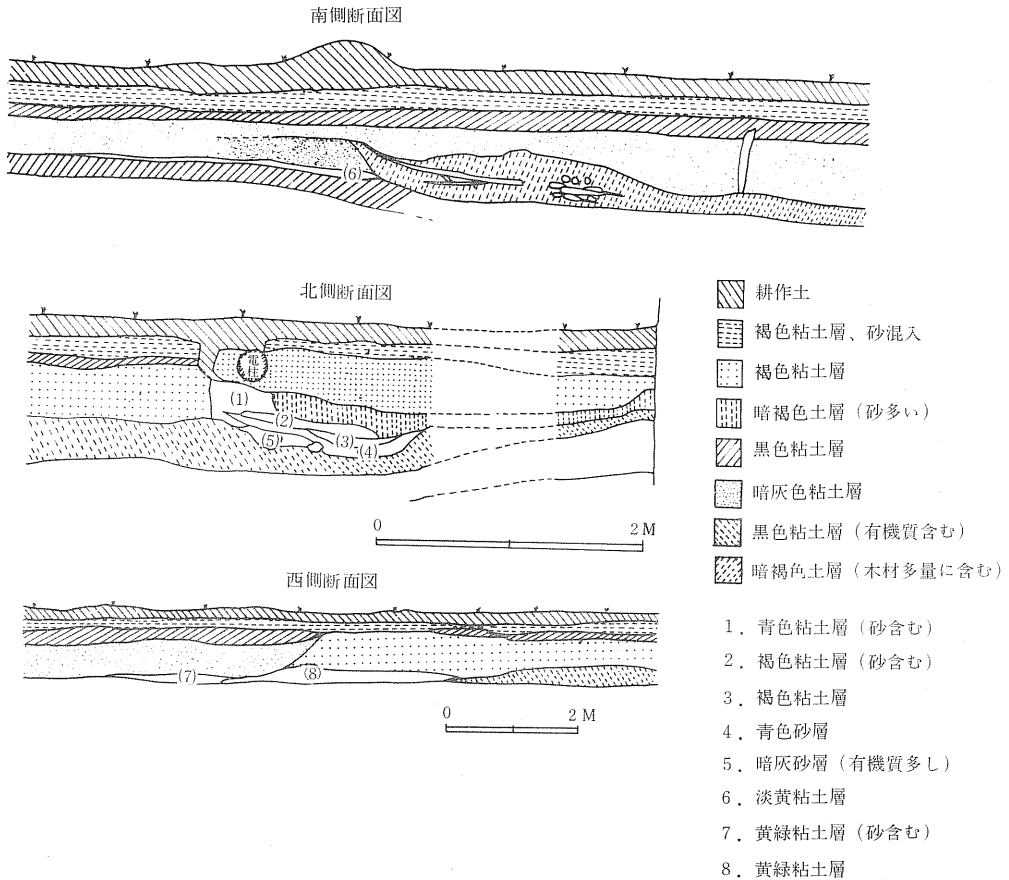


従って今回発掘の最下層たる第6層は、沖積層以前の更新世の摩当層上部に当るものと推定される。ただし地層名の決定には尚今後の専門的調査によらなければならない。

発掘地の東に隣接する灌漑用水路の対岸に見えを地層は、青灰色の様な粘土層であるのに対して、家屋埋蔵地域は表土を併せて下記7層から成っている。このことは、この発

第 2 図

発掘地域断面図



粘土層組成表

層 序	色		組 成				摘 要
	湿	乾	砂 色 %	泥及粘土 色 %	極微粒 色 %	植物質 %	
表土 (a)	灰 褐	灰 白	淡 褐 55	灰 褐 30 白 5	淡 茶 10		現在の耕作土 石英粒多し 植物の根、茎、葉等あり
表土 (b)	淡 褐	灰 白	淡 褐 80	褐 10 淡 褐 10			大部分淡褐色の砂 石英粒、輝石粒、黄鉄鉱粒少々 植物質少し
第二層	暗 褐	灰	黒 褐 55	黒 褐 30 白 10	褐 5		砂と粘土と半々 植物質を含む
第三層	淡 黄 褐	淡 黄		淡 茶 60 白 20	淡 茶 20		淡色の粘土、帯緑の部分あり 芦の根あり
第四層	黒 褐	灰		暗 灰 65 灰 白 15		20	暗灰色粘土 植物質多し
第五層	黒	灰 黒		灰 黒 40 黒 15	褐 黒 15	30	黒色ヘドロ層、コロイド状 植物質多量
第六層	灰 白	淡 灰	灰 白 70	褐 15	淡 良 10	5	大部分淡灰色多孔質の浮石質の 砂 植物質多し

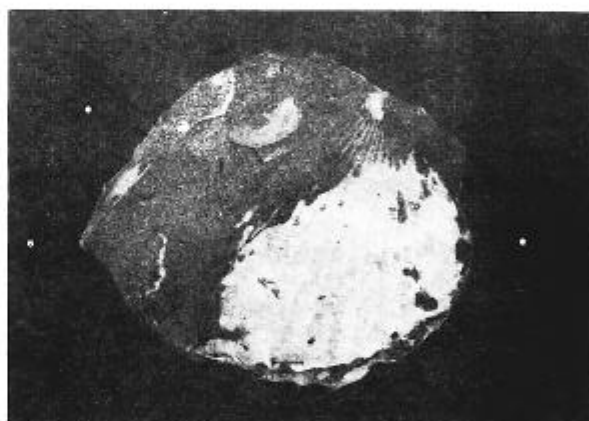
掘地域が当初は湖岸に近接した陸地であり、その後地盤の沈下が除々に行われ、沈下後も湖岸に近い位置にあったと見るべく、建物や土留の柵等の障得物があって一様な堆積が妨げられ、堆積物も時によって異なり、斯様な数種の異質な沈積層を形成したものと考えられる。

建物及び井戸などの作られた当時は、上記試料の第5層までは存在せず、その下の更新世以前の地層が地表を作っていたものと考えられる。その理由は

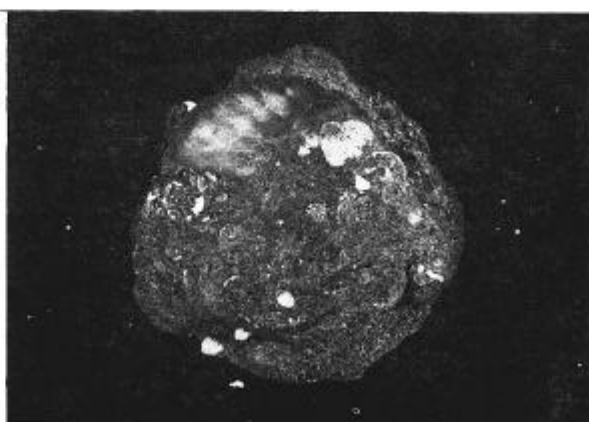
(1) 現在のような沖積層があったとすれば、井戸を掘ってもヘドロの中の腐泥水が混って清水を得られないこと。

(2) 建物を作るとしても、湧水のため到底使用に堪えないことなどである。その後は地表の沈下があって湖面が進出して当時の地表が湖底となり、砂、粘土、腐植土等が堆積して建造物を埋藏し、堆積が進むにつれて湖岸が前進して今日の様相を呈しているものと見られる。

なお水路の村岸には厚さ約20 cmの垂炭層が見られ、その上に白色の火山灰沈積層があり、更にその上に約1.5 mの粘土層がある。これは建物附近の層序とは異なっていて、かなり古い地層が不整合に続いているようである。発掘された井戸もこの粘土層の中に埋れているのであるが、水のため下部層を見ることができなかった。井戸附近の地層については不明な点が多いから今後の調査に委ねたい。



発掘地域の附近から垂炭片や写真に示すようなホタテ貝などの貝化石を発見した。これは第3紀鯖川層に属するものである。しかし、この垂炭や貝化石は発掘地の東方約30 mの道路上で発見したものであって、埋藏家屋と直接の関係はないが、家屋や井戸の位置の下部には当然この鯖川層が存在する筈である。今回の発掘では湧水が



多くて掘り下げができなかったため、鮎川層の存在位置を確かめることはできなかった。

建造物埋没の原因は静かな地盤沈下によるものと考えられる。その理由は次の通りである。

- (1) 前記の地層試料の組成に見るように、この沈積物は極めて細粒のものが多く、殊に第3、4、5層においては粘土質のみであるから、急激な山崖れなどがあったとは認められない。
- (2) 同様に不時の出水や洪水があったとも言えない。
- (3) 既に濁化していると言っても外海には通じているのであるから、どんな出水があったとしても、長期に亘って湖水面が上昇するとは考えられない。
- (4) 地震などのために急激な地盤変動があったとすると、建物は破壊散逸してしまう筈である。
- (5) どの試料試料にも植物質が含まれていることは、その層が植物の生育できる浅い湖底（湿地又は谷地）で生成せられたことを示すものであって、一時に深く水没したものではない。（赤尾孝太郎）

5. 家 屋 遺 構

飯森遺跡は、八郎瀨西岸の沖積層平地から発見された低地性遺跡である。そういう関係で、発掘作業は、湧水や流入水のために屢々妨げられ、家屋の床面の状態についての精しい調査は殆んど出来ず、調査の方向を主として家屋遺構材の出土状況と、その形態とに重点をおいた。以下に、発掘で得られた事実を記し、若干の考察を加えておく。

1. 家屋遺構の状態

家屋遺構の発掘は、既に用水路の西岸に露出していた遺構群の内側の水田を、一畝に掘り下げて行なわれた。説明の便宜上、調査区域をⅠからⅥまでの6区に分けた。（第3図）

発掘は当初、Ⅱか・Ⅳ区を中心に行なわれた。Ⅳ区からは、棟桁とおぼしき、一線上に並んだ2本の丸太材（Ⅳ—2）（Ⅳ—3）と、その西側から棟桁の上ののる様にして、約30°の傾斜をもち、板同土を突付けに並べた20枚あまりの屋根板〔Ⅳ—1〕と、それを覆う杉皮が見出された。屋根板の北端のところで、頂部の仕口に棟桁を嵌め込んだ柱、（Ⅳ—4）が、完形で発掘されたのが特に注目された。その外、2・3の種材（Ⅳ—8・9）や、屋根板とは異なる板（Ⅳ—5・6）なども出ている。

Ⅰ区からは、家屋遺材の並びと平行して、南北に列をなして、打ち込んだ矢板様の材群

がでた〔Ⅱ—1〕。その北端に近く、矢板列の東側に直立する柱根（Ⅱ—2）があった。

これらの遺材は、地表下約30cmから1mの間に包含され、包含層の凡その地層は、上から第4層腐植土と砂泥、第5層黒褐色粘土、第6層青鼠色砂、となっていた。矢板や柱根は第5層の土中に下端があり、Ⅳ区に埋没する遺材の最下部は、第6層にあったが、両者は、材質、加工の点から、同一時期のものと考えられる。

Ⅳ区の家屋遺材を除去した下の青鼠色砂層には、須恵器と拳大の砂岩礫が点在していたこの状況から見て、家屋の床面になるものと考えられ、この面の拡がりを求めれば、床面が現れて来るのではないかと期待したが、その作業途中で豪雨に見舞われ、遺跡が水没し、泥濘化したため、結局作業を放棄せねばならなかった。

第4、5層の地層は、矢板列の両側において、家屋遺構部分より約20cm低くなって窪んでおり、そこには木片が不規則に散らばっていた。従ってこゝには溝があったと考えられる。その方向は、南北の壁断面から考えて、矢板列と大体並行しているようである。但し、溝の成立は、層位的に見て、家屋の成立より時間的に遅れるかも知れない。

Ⅰ区からは、方形に近い断面の、直立した2本の柱様のもの（Ⅰ—1、2）が出た。その材の形態は、Ⅰ・Ⅳ区で出た柱とは断面形も異り、ずっと太い。それ故、これからはⅣ区の家屋の部分に属するものでなく、且つ年代差もあるのではないかと考えられるが、その性質はよく解らない。なお、この2本の材だけは、第6層の青砂層を突抜け、その下の粘土層中に深にその下端があった。

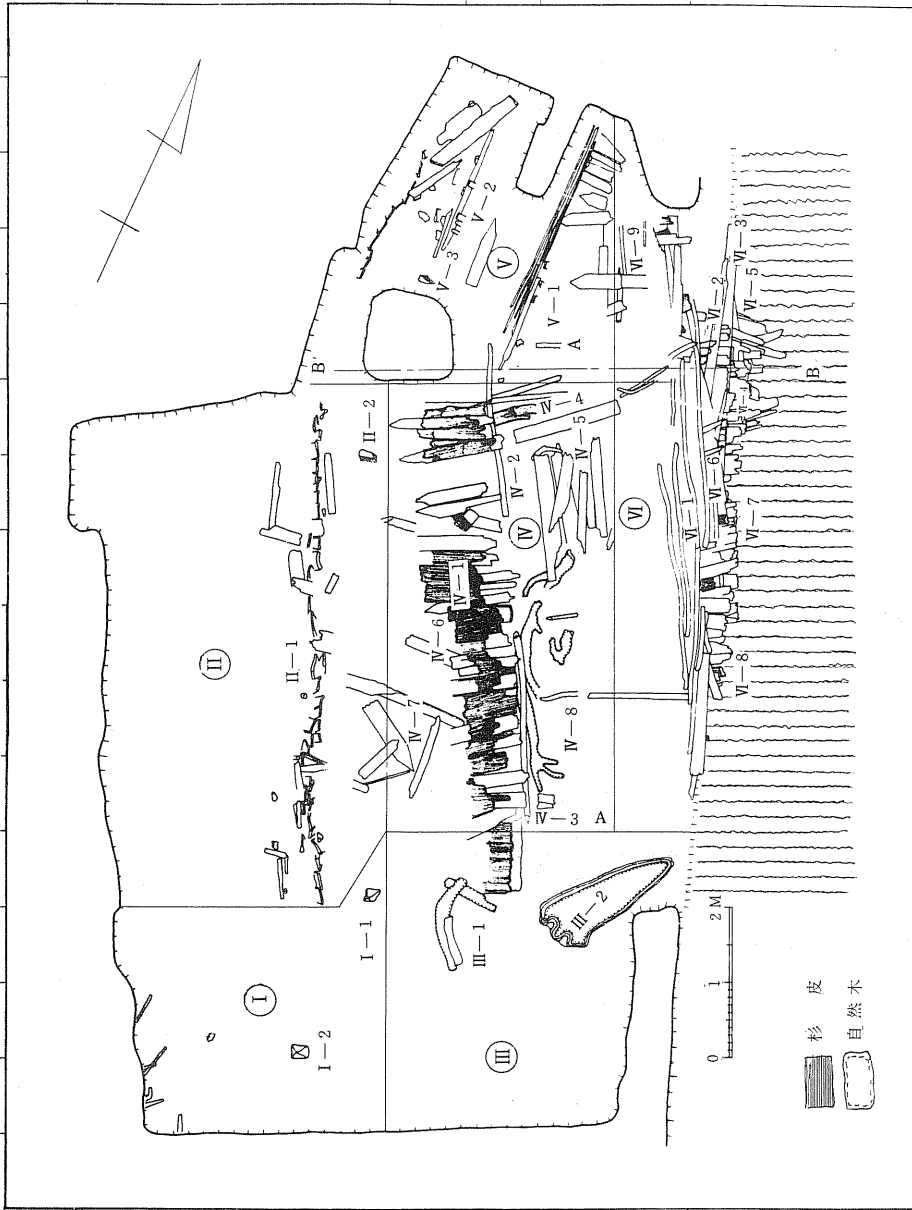
Ⅲ区には、大きな枝（Ⅲ—1）や、樹根（Ⅲ—2）が残り、巨樹が生えていたものらしい。これ以外は、ほとんど目ぼしい建築遺材は出土しなかったから、家屋部分はこの区にまでは及んでいなかったと思われる。

Ⅵ区では、覆土を除くと、非常に脆くなった直径7、8cmの長い丸太が2段に重なって用水路に並行して数本現われた〔Ⅵ—1〕。これらを除くと、Ⅳ区と同様の屋根板の並びがあり、それが2層から数層になって堆積しており、その間には小屋組などに用いられたと思われる材がはさまっていた。屋根板の一部は、断面が台形で長さ約4mの直材（Ⅵ—3）の上に、直角して突付けに並んでおり、この直材は木舞のようなものと認められた。

なお、この外にも屋根板と屋根下地との関係を示すような状況で出土したものが3、4ある。Ⅵ区の北側部分は特に深く窪んでいて、最も厚く屋根板が堆していたが、その最下部には、上側が焼け焦げた、人工が加えられたと認められる長さ約1.7mの木材（Ⅵ—11）が、横たわって出た。その出土レベルが、Ⅳ区で床面と推定した地層のレベルと等しく、土器も出土しているので、床面がこゝまで拡がっていたという推定も成り立つ。

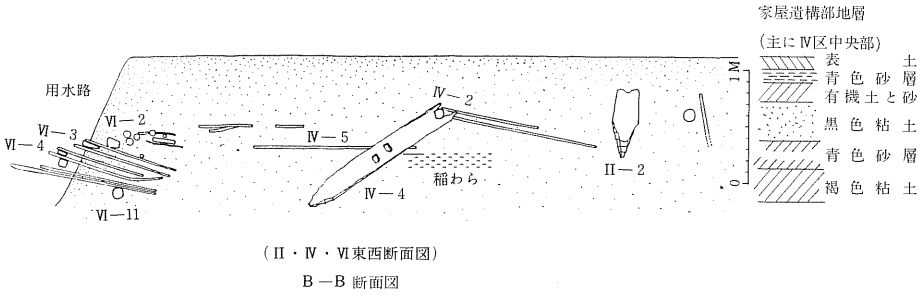
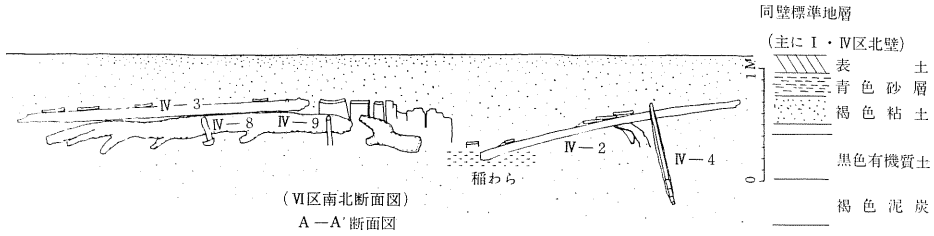
Ⅳ区とⅥ区の遺材群の出土状況には、同一の規則性が観察され、方向も一致していて、両者の関連性は疑う余地はないが、にも拘わらず、同一家屋の部材が両所に分れて遺存し

第 3 圖 家 屋 遺 構

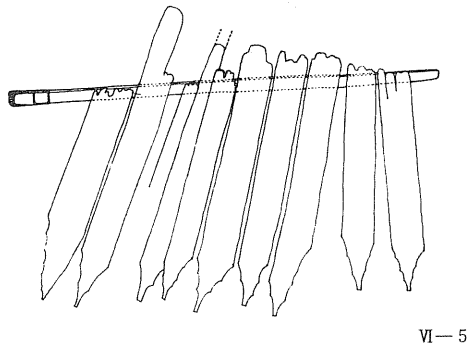
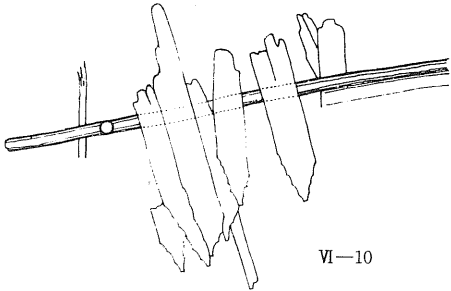
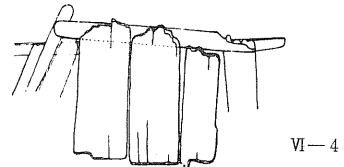
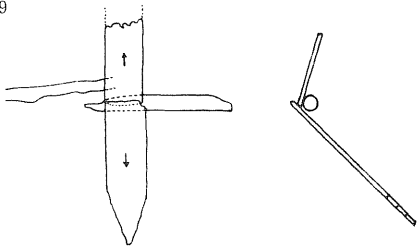


第 4 図

断 面 図



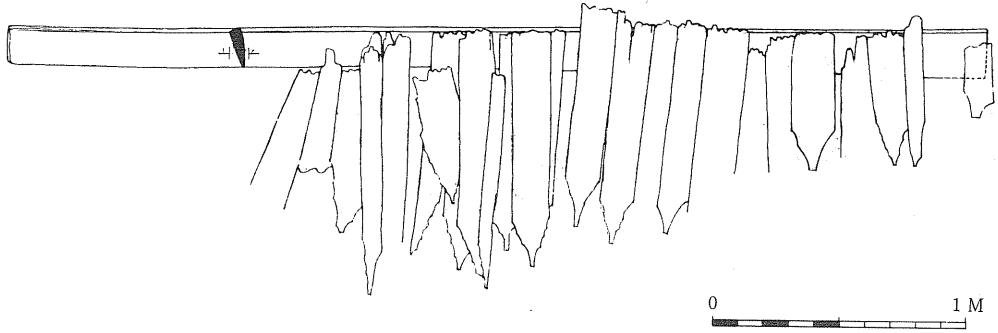
VI-9



VI区における屋根板と下地材の部分図

第 5 図 VI 区 部分 図

VI-3



たものか、或は夫々が別の家屋の部材であるのかということ断定できる極めては、遂に見出せなかった。

V区では、IV区の家屋遺構に接して、やゝ異なる方位をもって、2、3枚の横板を杭で支えた堰のようなもの〔V-1〕が出土していた。家屋遺構との関連が不明であり、堰そのもの、機能も解らないので、もう一つはI区の矢板列の延長部分を知るために、農道にまで入って北方にトレンチを掘ってみた。すると、矢板列は、この部分では曲線を書いて多少東の方に曲っており、〔V-4〕、なお北方に続くらしいこと、矢板列の東側から更に1本の柱根（V-3）が現われ、それはII区の北端にある柱根（II-2）と矢板との関係において類似していること、当初に見出された堰の1.6m西側から同様の堰が並行して出土し〔V-2〕、両者ともその長さは横板一枚分の長さでしかないことの三つの事柄が知られた。尤も、これらが示す意味は不明であるが、たゞ堰板の方位と大体一致する方位をもつ出土物、即ちI区にある2本の柱様材の並び、及び矢板列に接して出た2本の柱根の並び、があることが注意されよう。

用水路の東岸、VI区と対応する場所にも建築用材と思われるものが露出していたので、岸を崩して2.3cm程度発掘したが、単に遺跡が更に東方にも拡がっていることを確認したに終わった。

2. 建築遺材

建築に直接関係すると考えられる遺材に限って、各部材ごとに説明する。

柱 柱には三種のものが認められた。いずれも先端を尖らせた堀立柱である。

①細長方形断面柱 この種の柱は、一応家屋部材に属するものと考えられる。始んど、

柱根を残すだけであったが、Ⅳ区北端から出土したものは完全なものであった。この柱(Ⅳ-4)図版第2図は長さ1.55m、断面はほぼ17cmに7cmの長方形で、下端は斧で尖らせ、頂部はU字形にうがち、棟桁を納めるように加工してある。柱の中には、材表面で9×5cmの角形をした深さ3cmの穴が二つ彫ってあった。どんな意味があるのかちよっと見当がつかないが、仕口とも思えず、或は何かの符牒でもあろうか。この柱は、「皇国制度考」にある文化14年(1817)に北秋田群比内脇神社村小勝田から出土した家屋遺構の柱の図と(註)、スケールの点と柱根が尖っていないということを除けば、非常に似ているということが注目される。脇神発見の遺材が失なわれてしまっている現在、この柱は貴重な資料である。

なお柱根だけのものは4本(Ⅱ-2)(Ⅴ-3)(Ⅵ-7、8)図版第2図あるが、動いているのもあって、あまり参考にはならない。

②三角形断面柱 当該家屋に属するものと考えられるが、柱であるかどうかは明らかでなく、従って用途も不明である。2本(Ⅳ-7)図版第2図(Ⅴ-6)出たが、どちらも一端が尖っており、朽壊している他端よりも材面の侵蝕が少いという観察から、元は土中から立っていたものらしいと考え、一応柱に擬した。

③略方形断面柱、Ⅰ区出土の2本の柱様材(Ⅰ-1)図版第2図(Ⅰ-2)であるが、前に触れたように、Ⅳ区を中心とする家屋遺材とは別種のものであろう。柱様材といったのは、直立する材の頂部(発掘時の)が、普通なら腐蝕して丸くなっているのに、2本ともあたかも斧で削ったように鋭く尖っていたことで、建物の柱と断定するには躊躇を感じたからである。

屋根板 巾15~25cm、厚さ2.3cmの割板で長さは2mを越えないであろう。多くは片面に樹皮が附いたままで、中には断面がや、弧をなすものもあるので、巨木の外周から年輪に沿って、楔などを用いて打ち裂いて採ったものであると考えられる。始んど皮付の面を下にして出土したから、屋根板を葺く場合、皮付面を下にすることを原則としたらしい。又2・3を除いて他の全部、一端が尖っているが、木取りの時のやり方なのか、或は葺板材として特に目的をもって加工されたものか、その辺はよく解らない。

板類 数は少いが、屋根板材とは出土状況が異なり、板厚1.2cmと薄く、或いは端部が直角に切断されている、というような板がある(Ⅳ-5、6等)図版第2図一般に、屋根板より表面の仕上げが丁寧で、鉋を用いたらしきものもあった。

木舞或は母屋称材 すべてⅥ区から出土した。完形と考えられるものは1本のみであるが、それは断面は台形ないし長押形で巾16cm、厚さは厚い方で4cm、長さ4.02mの通直材である(Ⅵ-3)図版第2図製材加工の程度は相当立派で、鉋で仕上げている。屋根板をの

せていたから、軒先廻りの材と考えられるが、何ら仕口の跡を持っていない。その他、出土状況から木舞と思われるもの、断片が2・3認められた（Ⅵ—4、）。版第2図

梁様材 長さ2.55m、断面6×12cmの材（Ⅵ—2）図版第2図堆積する屋根板の上から出たが、出土状況からして屋根部材とは考え難く、むしろ軸組材とする方が適当と思われた。柱であれば残存する確率が大きい尖った端部が見られず、巾も柱にしてはかなり狭い点から、梁と見做すのが適当と考えられる。

棟桁 Ⅵ区から、一線上に2本（Ⅳ—2、3）、木元を家の内側にして出土した。長さは（Ⅳ—2）材が2.35m、（Ⅳ—3）材が2.60mで、材経約8cm、枝を払った程度の杉の丸太である。

種 種と思われる様な材はかなりあったが、殆んど長さ20～30cm程度の破片であった。幸い、比較的保存のよいものがⅣ区から2本南側棟桁にほぼ直交して出土、直交して出土した（Ⅳ—8、9）。図版第2図2本の種の間隔は約1m、種の材経は7cm、その1本は折れているが約2mの長さがある。加工は丸木の樹皮を剥いだ程度のもの。

杉皮 屋根板の上に敷かれていたもの、外に、断片が各所に散乱していた。葺材として使われたものが主体であろうと思われる。

藁・萱 Ⅳ区の北側棟桁の南端部分に藁が堆積していた。稜がついていたから稲藁である。又Ⅵ区の中央や、南より辺には萱が茎を南北方向にして堆積していた。これらが家屋の一部に用いられていた可能性もある訳である。

その他 遺材に関する限り、釘・鋸等の金物が使用されていた形跡は全く認められなかった。材同士の緊結は恐らく植物繊維材料を用いたものだろう。

3. 発掘家屋に関する考察

今回の発掘では、得られた資料が大部文断片的であったので、家屋の全貌を云々することは困難であり、以下に述べることも推定の域を出ないが、一応考えられる範囲の考察をしておこう。

家屋規模 どの位の大きさの家であるかという事に最も関心が寄せられたが、それを明らかにする家屋平面も柱配置も分らず仕舞であった。矢板列が家屋遺構に接し、原位置を動いてまいと思われる2本の柱根（Ⅱ—2）図、（Ⅴ—3）が約70cm内側に矢板列と並行に位置しているように見えるので、矢板列も家屋の外周を極める要素になるのではないかと考えられる。しかし、これまでの状況では、矢板列が家屋遺構よりも更に北方に延びているような感じで、矢板列を家屋部分に含めてしまえるかどうかは問題として残される。結局、規模の推定は部材寸法に頼る他はないのである。

a 桁行寸法の推測

（イ）棟桁から 2本の棟桁で、桁行全体に渡されていたものと考えられる。2本の長さ

を合せると、4.95mとなる。柱は北側棟桁の場合、先端より80cmの位置にあるから、南側でも同じとすると桁行の柱間長さは3・30~40mとなる。材の腐朽など考慮すれば、多少これより大きい数値になろう。

(ロ) 屋根板から IV区の屋根板(IV-1)は、一部乱れていたが、これらすべてを隙間なく突付に並べると、屋根の側から側までの長さはほぼ4mとなる。VI区の屋根板列も層によっては、両者端の間が、4m位の長さになっている。

(ハ) 木舞?から、前述のように完形材では4m強の長さをもっている。

(イ)・(ロ)・(ハ)から桁行長さは4m弱と推定される。

b 梁行寸法の推測

梁と推定したもの、寸法の外、頼るものがない。従ってその寸法2.55mから2.5m位と推定。

従って、この家屋の軸組部の規模は、梁間約2.5m桁行4m弱という一つの推測が成り立つ。しかし、床平面の規模は水浸のため調査未了である。

家屋形態 竪穴式家屋と考えられるが、それは

1 総高1.6mに満たない柱を堀立にして立てると、地上に立つ高さは1m前後となり、平地家屋としては低すぎて、内部を堀り込まなければ実際の用に立つ空間は得られないだろうということ。

2 推定床面が、柱の下端と同じか或はそれよりも下にある。

ということの2点からである。

屋根の形は、出土した屋根板材群が東西方向にのみ偏っていたことから、切妻でないかと思うが、楕円形のような屋根形も想像されない訳でもない。

屋根板は榿と木舞の下地の上に、流れ方向に突付けに並べられ、その上を杉皮で葺き、丸太などで押えたものであろう。

家屋の性格 結局、当遺跡の家屋は、かなり小さいものであることは確実である。しかし、これが、集落の一部である可能性は、野井戸とは思えない立派な井戸が、近くから発掘されたことを見ても、十分に大きいといえる。

4. 結 び

当遺跡の家屋が、果して何であるのか、即ち住居なのか、附属小屋なのか、或はそれ以外のものか、という判断も、比較できる家屋遺構が近くから出する時まで延ばされねばならない。その外、多くの問題と疑問が残された訳であるが、それはこれから継続される発掘によって順次解き明かされて行くものと期待している。(福山敏男・永井規男)

(註) 「皇国度制考」は日本経済大典第15に所収。

附 文中()〔 〕は掲載図中の遺材のあり場所を示す。()は単一材を、〔 〕は群材である。

6. 出土遺物 (第6図・第7図・第8図)

1. 須恵器

本遺跡から出土した土器類は、おおむね建築物直下の北東部に密集し、地表から1m～1.5m前後から出土したものである。

井戸から出戸した須恵大瓶の破片2・3を始め須恵の碗、皿、そして土高杯、皿等である。完成品並びに復元可能な土器は60数個あり、これ等の大部分にはロクロの跡が見られ底部には糸切りの跡をみせ、外面は平均された焼き具合ではあるが、内面は粗雑な様相を呈している。

そして、これ等の土器類は大体7種類に大別される。

即ち、①器台付碗、皿②台付碗、③底部が上底になっている④ロクロ跡の明瞭な鉢、⑤ロクロ跡の明瞭な碗、皿⑥薄手の土師皿、⑦杉恵の蓋、その他の各種である。これらを項目別に簡潔に述べてみよう。

①器台付碗、皿 (1～9)

底部に糸切り痕を残し、三角状に近い張付器台を持つ須恵製の碗である。特に③は、くの字状の器台で中央部にはロクロによる突起を持つ。又この類群には、高さ3cm前後の低い皿があり、内面には漆をほどこし口縁部は、若干外反していて碗形のものよりも厚みのある器である。

台付碗 (10～29)

この類群は、本遺跡中もっとも多くあるもので、底部より胴部にかけて自然の曲がり呈しているものが大部分であるが、13・16等の様に垂直に近い状態でせりあがっているものもある。

③底部上り土底になっている (30～42)

0.5cm～0.8cm前後の比較的、厚手の土器で底部に特徴が見られる。即ち、底部がロクロ使用の為に0.2cm～0.5cm程のくぼみが見られ若干不安定な感じを受けるものである。

④ロクロ跡の明瞭な鉢 (43)

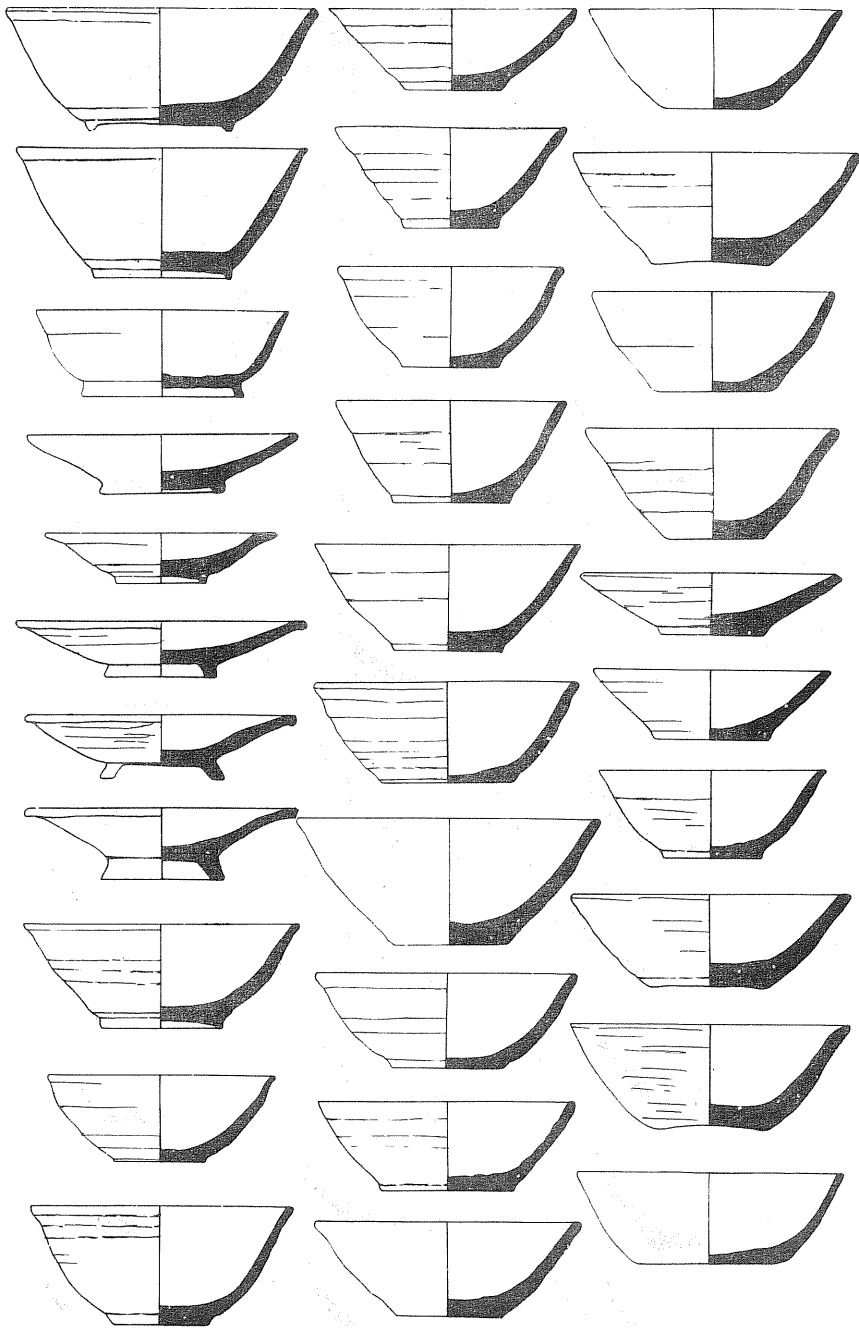
赤褐色を呈し外面には、5条の比較的深味のあるロクロ跡が明瞭にみえ、他の土器よりも高さがある。5.5cm

⑤ロクロ跡の明瞭な碗、皿 (44～49)

糸切りが見られるのは④群と同様であるが、底部から胴部に至っての変化は、それよりも極単に見られず、厚みのある、くの字状の形を呈している。

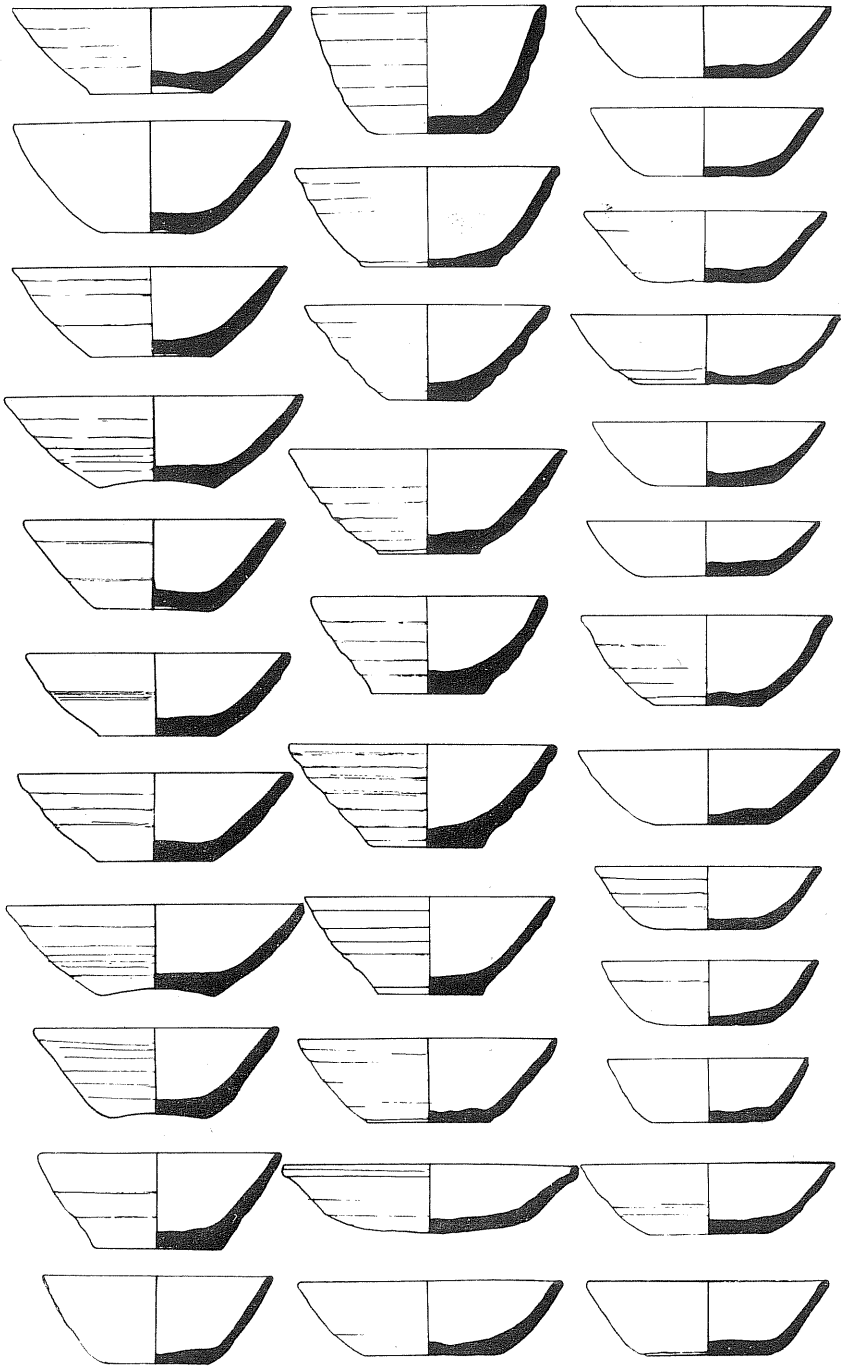
⑥薄手の須恵器 (51～67)

第 6 図 須 惠 器 (1)



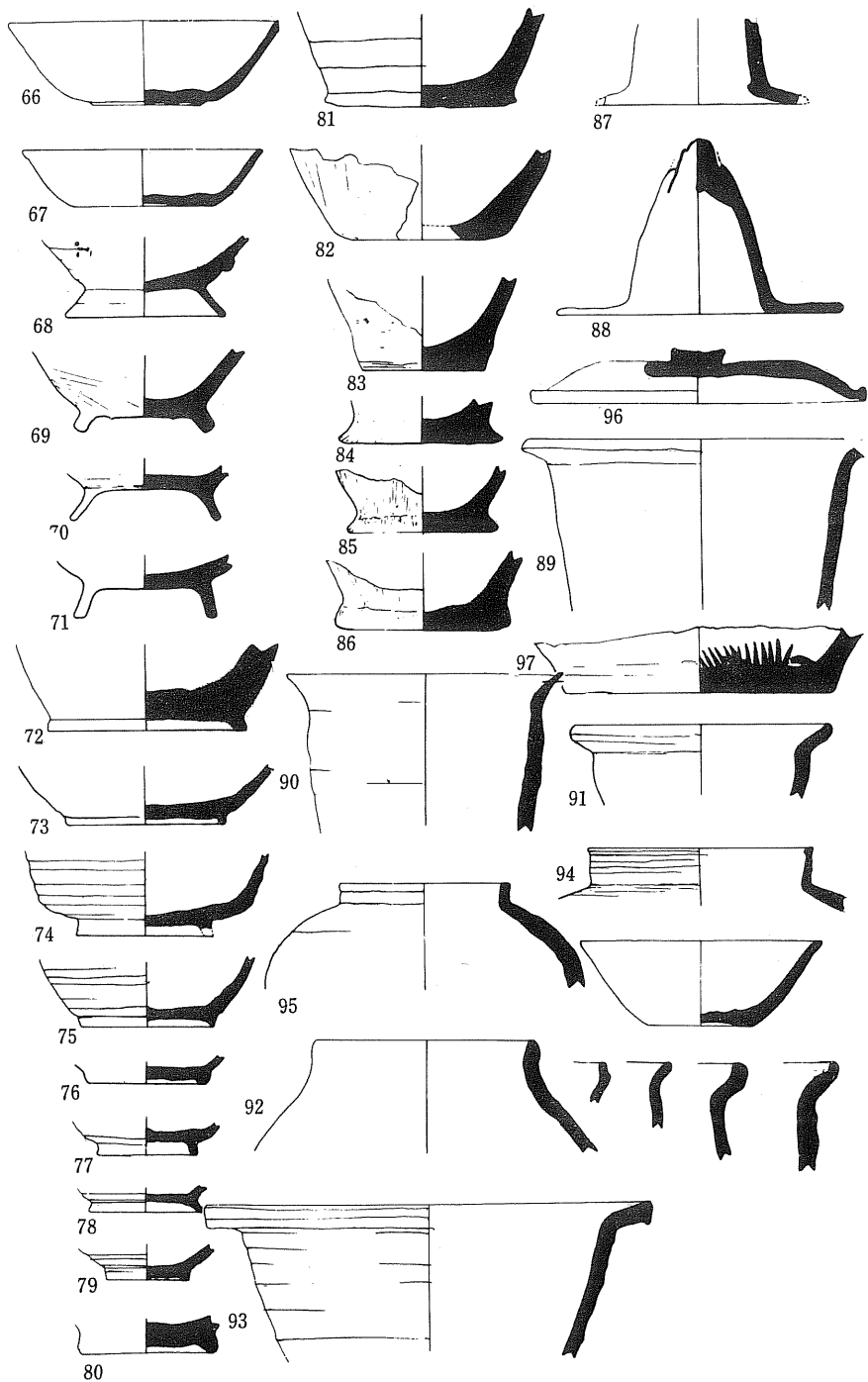
S = 3 : 1

第 7 図 須 惠 器 (2)



S = 3 : 1

第 8 図 須 惠 器 (3)



S = 3 : 1

器の高さが略々一定している（3～3.5cm）須恵器の皿でロクロ跡は、あまり見られずあったとしてもさほどの深みはない。しかし、底部の内面には凸状のロクロ跡がみられ、全般に厚みはなく特に56 64 66 67は焼きが粗雑である。又、57の器は底部が長く、口縁部が垂直がかっている所に特徴がある。

⑦須恵蓋（96）

中央のつまみの部分に小さな突起がみえ、ふちの部分は太い線がある。

その他、復元不可能ではあるが器台のあるものに68～80の器がある。特に68～71の4個は、くの字状をもち、しかもその高さが2.5cm前後の高さをもつ典型的な高い張付器台であると考えられる。69は特異なもので底部には、更に小さな突起をもっている。その他、器台が丸いもの、三角状のもの、垂直なもの多様な内容をもつ。81～86は底部のみの土師で篋状のもので整形し、相当な厚みをもつ。

87 88は、粗製の須恵器環であり、後者は特に上部との結がりに興味がある。89 93は、口縁部が外反している須恵碗、壺であって数条の痕跡が見られる。又、94 95の2個は、井戸中から出土した須恵大瓶の破片であって外面はへら状の痕が見られ、内面はうずまき状の文様がある。口縁部は、略々垂直になっており胴部につながりを見せている。

更に97は、底部の内側に数条の深みをもった痕跡をつけ特異な土師器である。

2. 墨書須恵品器（第9図）

本遺跡に於いて墨書が見られる土器は、保存状態が良好な為、総数47個を数える。

須恵器の碗、蓋が多くその他土器にも若干みられる。

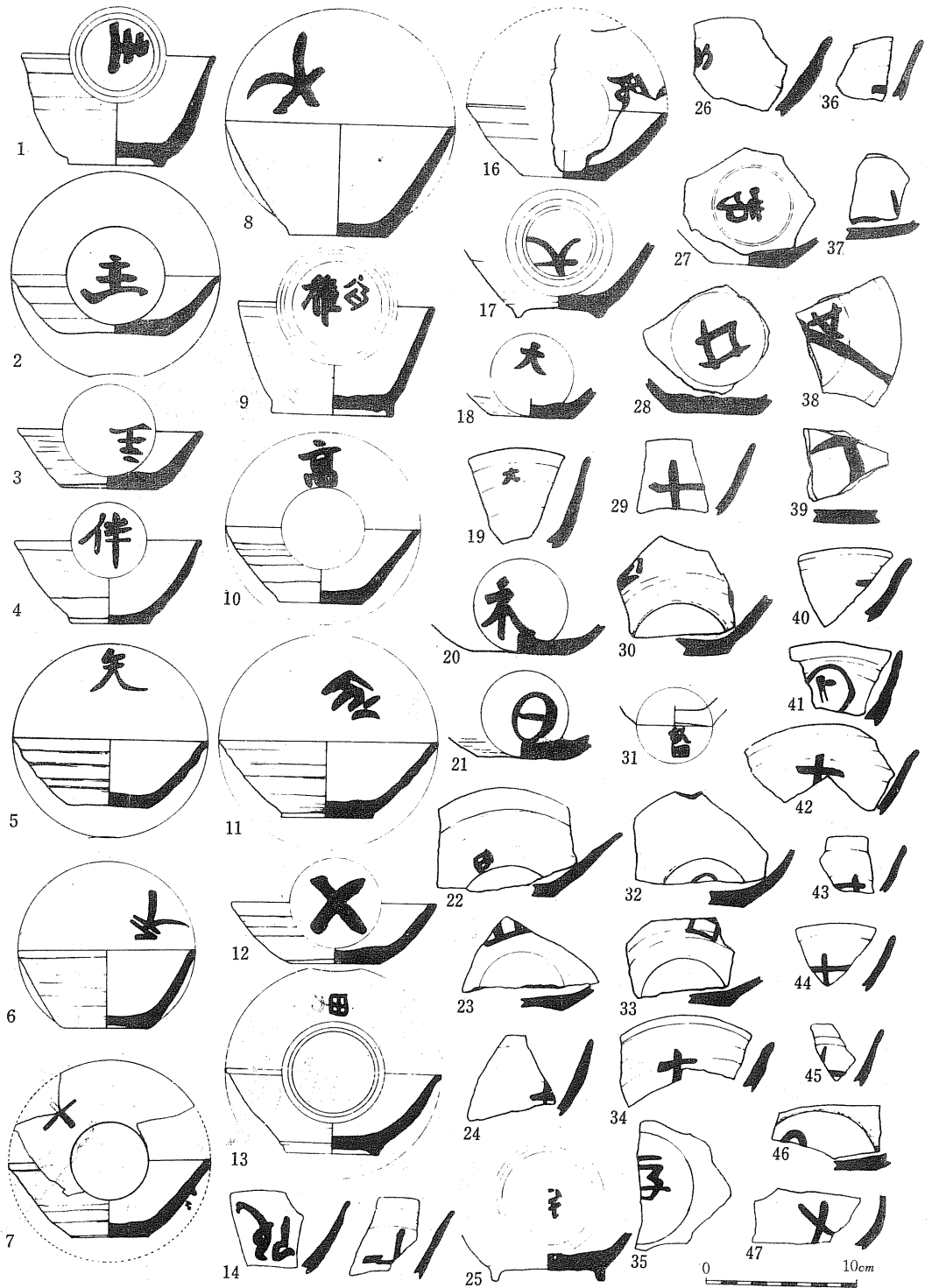
ここでこれら墨書土器に関して2・3の分類方法を試みてみよう。

即ち、その一つは書かれている器の場所に関して、そして他の一つは、その書き示されている文字に関してのそれについてである。

①墨書の示されている場所に関して

その場所	その総数	その土器番号
胴部	29	5. 6. 7. 8. 10. 11. 13. 14. 15. 16. 19. 22. 23. 24. 26. 29. 30. 33. 34. 36. 37. 38. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 47.
底部	18	1. 2. 3. 4. 9. 12. 17. 18. 20. 21. 25. 28. 31. 32. 35. 39. 46.

第 9 圖 墨書須惠器



②文字に関して

その文字	その総数	その土器番号	その文字	その総数	その土器番号
十	8	7. 12. 29. 34. 42. 43. 44. 47	伴	1	4
大	4	8. 17. 18. 19	高	1	10
主	3	1. 2. 3	仙	1	11
矢	2	5. 6		1	9
田	2	13. 22	秋田	1	31

その他、「衣」「帯」「女」が各1個ずつあり判読が困難なものが20個ある。

以上2つの問題に関して、その分類を試みたわけであるが①にかんしては、その書かれている場所は胴部に多いことが明瞭であることがわかり、しかもその大部分は、「+」を始めとして判読ができかねるが簡単な数字を表わしたものが多い感じを受けるのである。

又、底部に示されているものは、明瞭でかつまた力強い筆のはこびが見受けられる。

②にかんする字型は、圧倒的に「+」が多く、その他、「大」の4個、「主」の3個、「矢」「田」が各々2個という順になっている。これら字形からそれぞれの意味、内容を検討すれば地名、職業名、人名の頭文字と多種多様に考えられるがこうした問題については更に研究する余地があると思われるのである。

特に9の「穉」31の「秋田」の2つは、本遺跡の内容、性質を考えてゆく過程において重要な出土品と思われる。(鍋倉勝夫)

3. 木 器 (第10図・11図)

この飯森遺跡は八郎瀨沿岸に位置し、水田地帯であるため、木製品の保存が良く、多くの出土を見た。その主なものは舟形木器、碗皿、蓋、織機具の一部と思われるものである。これらを図によって説明しておこう。

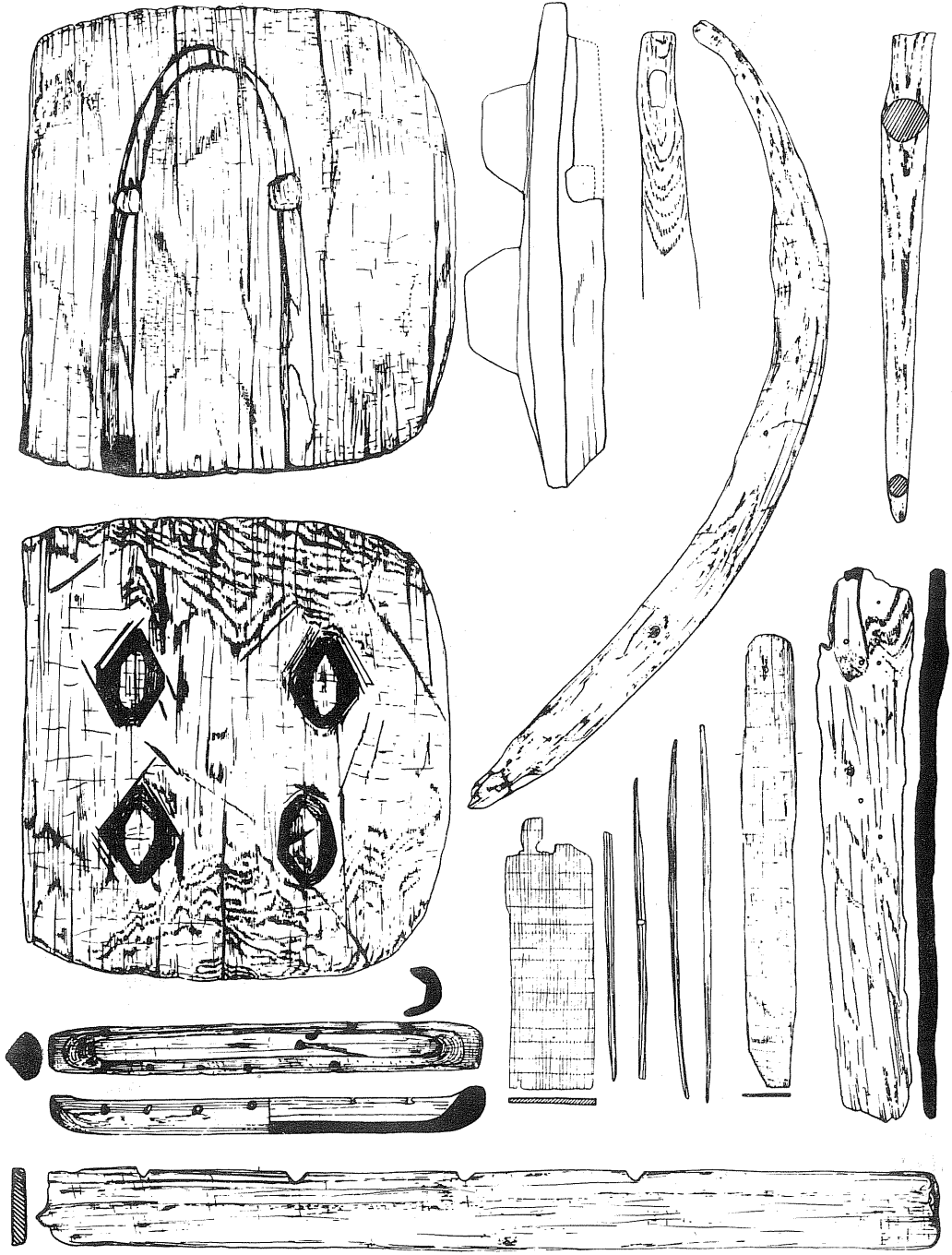
1、(第10図)、田下駄である。その大きさはたて29cm、よこは左側欠損して居りはっりしたいが約30cm前後を計るものと予想され、ほぼ正方形を呈する。表は足を入れる部分(内側)と外側との間を土手のよう楕円形に高く残している。そして鼻緒の代りをなすものと思われるものが、その土手の先の左右両方に孔がある。(側面図斜線部)その他鼻緒らしきものは見あたらない。裏は四つの歯がある。尚この田下駄は今回の調査で出土したものではない。

2、自然に曲った木の先端に長方形の孔をあけた木器である。

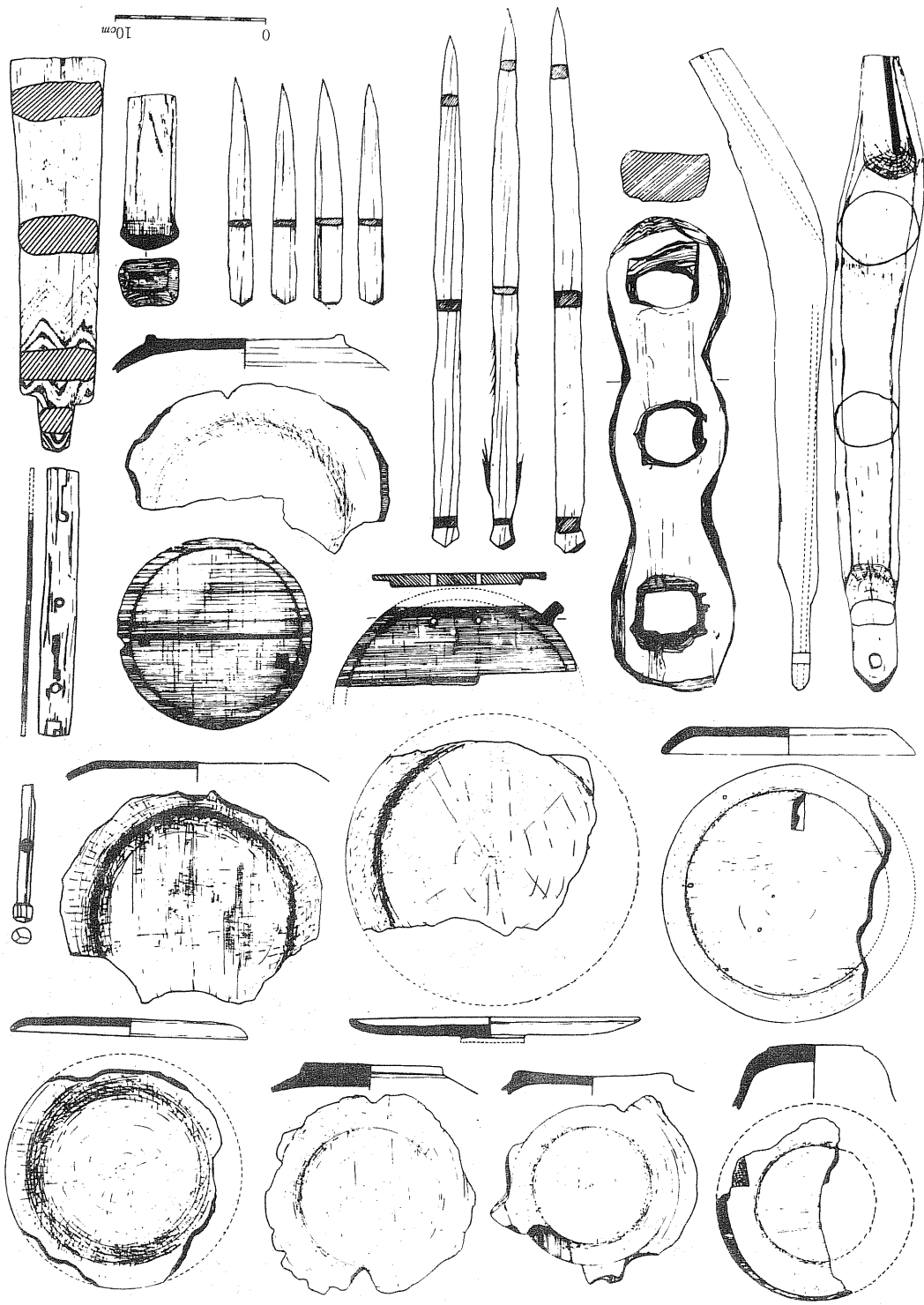
3、棒状を呈し表面はまるく製形されている。

4、舟形を呈した木器である。その大きさは長さ28cm、巾3cmで、中をくりぬいている。

第 10 图 木 器 (1)



0 10cm



第 11 图 木 器 (2)

その両側面には不規則に孔があげられている。

5、曲げ物の側をなすもので図はその内側である。

6～9、箸状木器で本遺跡から数十本出土している。

10、うすい板を使って図のような形にし、上の方に小さい孔がある。綱を縫う時の針のような気もするがはっきりした用途は不明。

11、表裏とも全く整形されていない。そして小さな貫孔された孔が不規則にあげられている。

12、平な板を用い、その片側だけを等間隔に三角状の切込みがある。織機の一部であろう。

13、(第11図)、口縁部は不明であるが盥と思われる。断面の如く胴部に張りが見られる。

14、15、器台のついた皿であろう。14、15ともにろくろの使用がはっきり認めることができる。14は井戸の中より出土したものである。

16、17、19、皿である。非常にうすい。これでもろくろが美しく整形されている。17の皿には小さな孔が5個あげられている。

18、皿のようにも見られるが、小さなつまみがあり蓋ではないかと思っている。

20、21、いずれも曲げ物の底部である。5のようなうすい側がこれにつくのである。そしてこれらの底部及び側等を結んでいるものは桜の皮である。この底部にもそれがついて残っている。(図の黒い部分がそれである。)

22、器台のついたかなり大きな木器である。皿ではないらしく盆のようなものであろう

23、栓のような木器である。頭部上端は三角錘の形をなしその下は円形に近い多角形をなす。胴部は頭部より一まわり細く先端に行くにしたがって細くなっている。

24、この木器だけ縮尺が異なる。大きさは長さ36cm、巾5cm、厚さ0.5cmを計る。中に円形の孔が3個、両端に四角の孔があげられている。織機の一部であろうか。

25、一本の木材をたんねんに削って作られた木器である。図上部は板状に加工され、その端に近い所に孔があげられている。そして面白いことに、この孔と交叉して木の中に図点線のように孔があげられている。下部も上部の部分に似た加工がなされている。ここは表面だけが平らに削られており、その部分だけの断面は半円をなす。平に削られた部分には溝が1本つけられている。又上部の場合と同様に木の中に孔があり、それはちょうど曲っている部分で外に出ている。織機の一部かと考えているがはっきりしない。

26、かなり厚い板を図のように削り、中に大きな3個の穴があげられている。

27～33、これらの木器はいずれも井戸の中より出戸したものである。これらの土器は頭部に特徴がある。頭部は全て山形に削られ、その下が少しくびれて、次に頭部と同じ中に

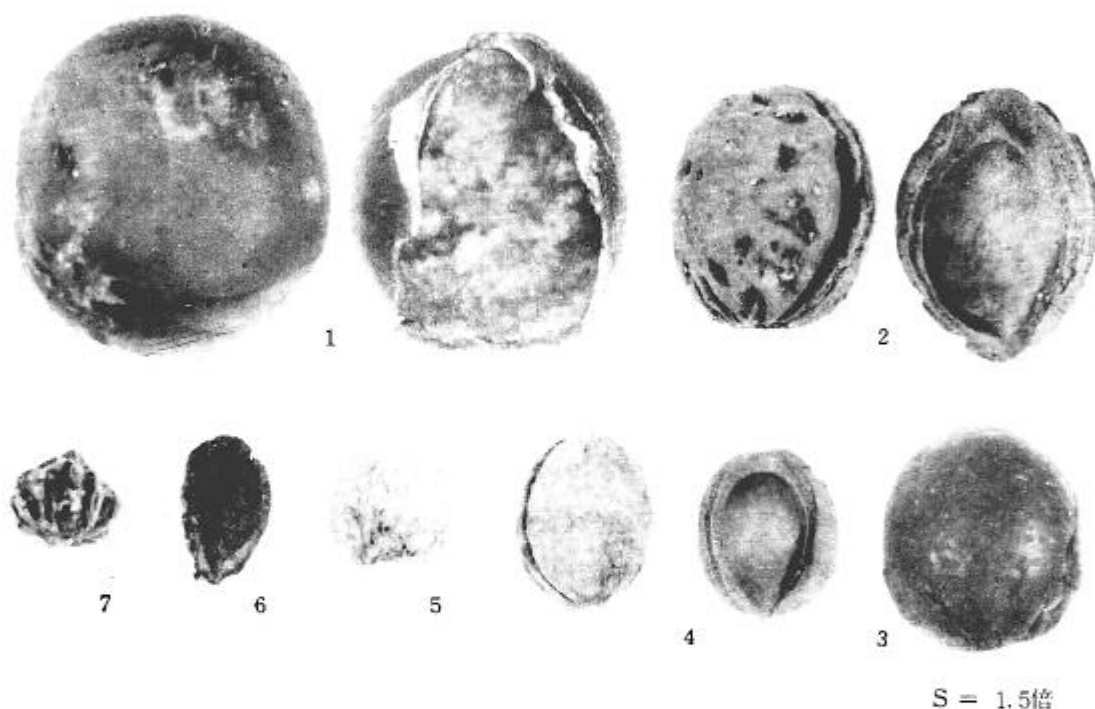
なり、それから自然に細くなって先端は鋭くとがっている。このように全長35cm前後のもの
と30~33のように15cm前後のものがある。井戸の中だけでなく家屋遺構のあった地点
からも出土して居り、全部で十数個数える。

34、先端に握りのある木器である。織機の一部であろう。

35、これも織機の一部と思われる。図上部を4cmほど削っている木器である。(富樫泰時)

4. 植 物

12図 植物種子



1. トチノキ (*Aesculus turbinata* Bleme) の種子

この植物は普通山地のブナ帯下部にあるので、この地に自生のものとは思われない。おそらく救荒食糧として採取貯蔵されていたものと思われる。

2. モモ (*Prunus persica* (Linn.) Batsch) の種子

現在の栽培品種より種子が小さいので野生の原種に近いものと思われる。

3. スモモ (*Prunus salicina* Lindl.) の若い果実

4. スモモ (*Prunus salicina* Lindl.) の種子

5. カボチャ (*Cucurbita moschata* Duch.) の種子片

6. スイカ (*Citrullus vulgaris* Schrad.) の種子

7. サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.) の種子(加藤君雄)

5. 獣

骨

1、考古班の埋没家屋等の発掘により知った事項

イ、飯森に於て埋没家屋が発掘された土器、獣骨、種子等が出た

ロ、家屋の状況等より考察して年代は大体平安中期（約千年位以前）と推定

2、以上の事項を参考にして獣類の種類、獣骨の部位等につき次の如く鑑定す。

（大学の藤岡、高安の両博士も同意見）

1、獣類は馬

現在の馬の大きさに比して幾分小さい。

2、歯骨一上顎のものか下のものかは不明。

3、9/20、2T 2層のビニール袋に入っているものは後肢の跗前骨（人間の跗骨に相当？）に思われるが後者の下腿骨とすると少し細いようにも思われる。

4、10/4、13区3層記入のビニールに入っている骨は腕前骨（人間の掌骨）の一部か。

5、黒青粘土 9/23 13区記入のビニール袋の中の骨は腕前骨の上部の関節のところか。

6、綿に包んである2個の少し巾広い骨 9/20~2T 2 及 9/20~27 2 は何れも前肢の前膊骨（人間の橈骨、尺骨か？）の上部の辺の骨のようだ。

7、ビニール袋に入っている小さくこわれた屑ものも大体右記した骨のかけらと思われる。

8、10/7 井戸ノ中と記入の試験管在中のものですがこれらに類する骨片と思いますが確とわかりません、不明。

要 約

1、獣骨は馬と判定（歯型より判断して間違なし）

2、長い骨の状態から勝手に前肢のものだろうとか後肢のものらしいとか記したがもとより不確実。専門家の鑑定を乞わねばはっきりしたことは不明。

上馬の大きさは現在の馬より多少小さくあったように推定される。

以上の如く鑑定す。

秋田大学

橋 本 光 正

6. そ の 他

図版第5図のように木簡が2種出土している。これらの出土した層位は家屋遺構のあった地層より上層であって、福山博士によれば家屋遺構の年代よりいく分下り鎌倉～室町と考えられる。文字は下に記した如くである。

1. 「赤（花）餅壺（五）斗六升入」（両面共）。東京大学竹内理三博士。花餅五斗…は京都大学赤松、福山博士解説。
2. 「大はゐかく」は赤松、福山博士に依る。

7. 井 戸

井戸は家屋遺構の発見された地点より、北々東約30mの地点に、数年前原油輸送管を埋める時に発見され、東南障の上部を除いてほぼ完全な状態で発見された。

井戸は厚板7枚を横に組合せたもので、所謂井桁積重ねたものである。板の厚さは4～5cm、巾15cm～25cm、長さ1.3cm～1.4mの材を用いている。大きさは上の下では少し異なる。上縁の内ノリは90cm×84cm、下で71cm×68cm、深さ1.8mである。

この井戸の構造は前記したように厚板を7枚横に組合せ、その内側に図（井戸内側々面図）のように先端を尖らせた割矢板を四方に立てている。そしてこの矢板を保護するため矢板の内側に角材を帯状に互に組合せられている。矢板の大きさは巾10cm～15cm、厚さ1.5cm～2cm、長さ75cm～82cmである。

井戸の中からこぶし大の石が数個発見された。又外側には平面図、断面図の如く、砂が井戸を中心に円形にしかれてあった。

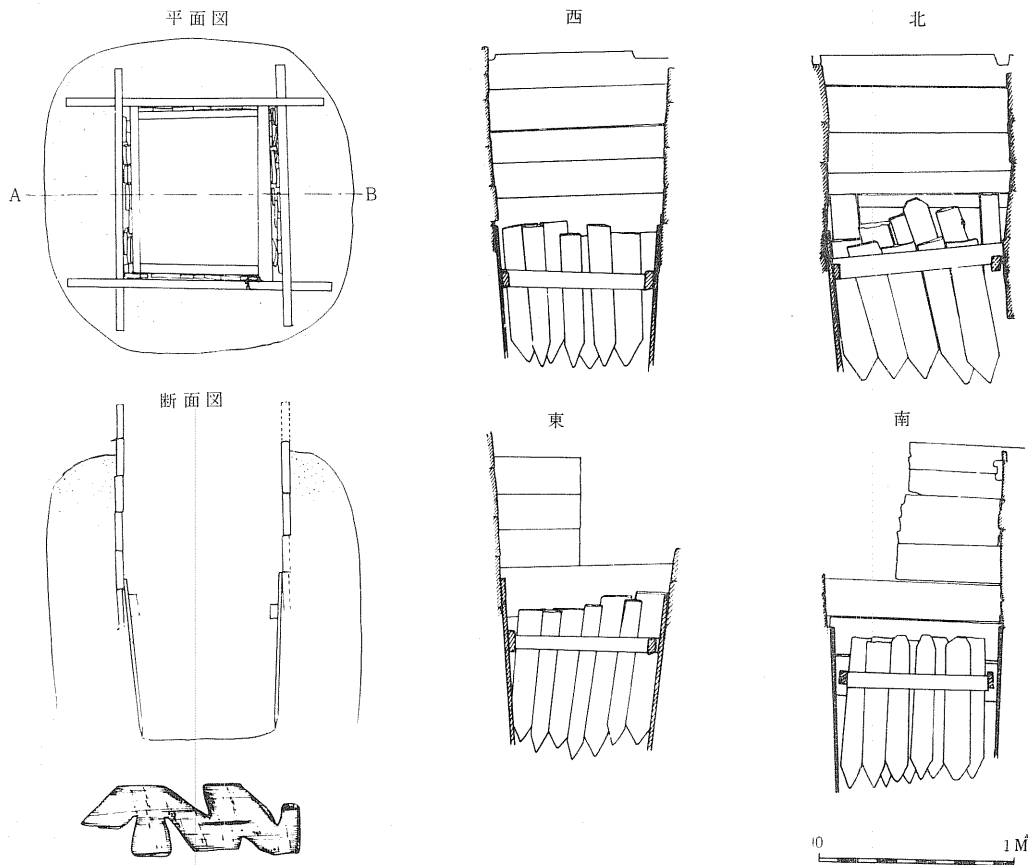
遺物は須恵器、木器等が出土した。これらについては前記（木器の項）した通りである。ただ一第13図（ ）下に記したような木器も出土した。左右欠損している。うすい板を両側から三角状に切込んで作っている。

なお、この井戸と家屋遺構との関係については、これらの間がかなりあるため、直接結びつけることはできないが、出土遺物、その他から考えてほぼ同時代のものと考えている。

（富樫泰時）

第 13 図

井戸実測図 (附 井戸中の木片)



(井戸の中より出土した木器)
長さ12cm 厚さ3.5mm

7. 結

び

小谷地遺跡の第一次調査は雨天の為、調査地域が再三水没するという悪状の下に続けられ、一棟の簡易な構造の作業小屋とその西側から北東に廻ぐる低い障壁様の構造物、住居の内外の床面から 100ヶ内外の須恵器、木器を発見した。この陶器の形式は秋田城、払田柵等の出土当に類似しその形状は坏型が大部分であり、また墨書銘の 仙、主、玉等は払田柵址にも見られる。又 穉は秋の異字であり、これらの出土品から秋田城治下の官営の施設であろうと推測される。木簡や馬歯、粃がらの出土もあったがこれらは倒状家屋の上土層に発見され、やゝ年代は新しく木簡の書体等からも鎌倉一室町の項かと考えられる。またこの建造物が孤立したものか聚落をなしていたかは全く今後の調査によらなければならないが、北東にある井戸構造の立派なことからもこの附近に今少し本格的な建物の存在を想像したくなる。いづれにしても、この建造物が自然発生的な農村的集落でないこと、むしろ屯田的な出作りの田小屋であることは、この建物の立地するへドロ状態と墨書銘の陶器、以前に出土した田下駄の存在等から考えられよう。(奈良修介)

8. あ と が き

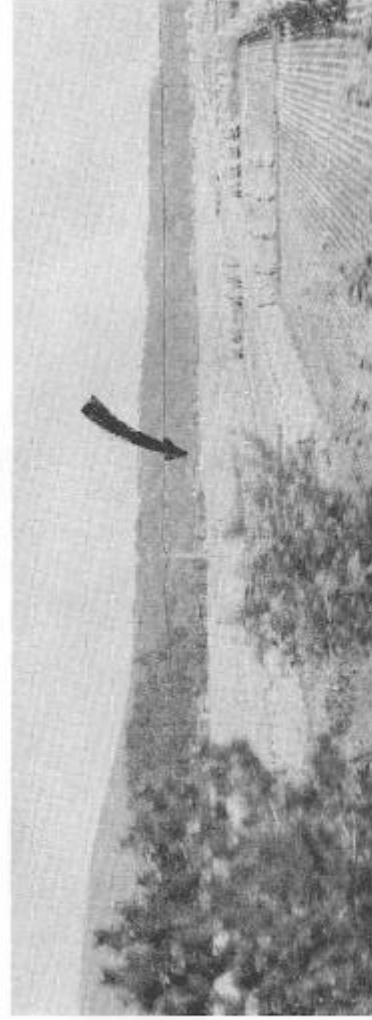
この発掘調査は、第一次調査としての性格から、遺跡の全ぼうを解明したものではなく、一部分の資料の収集にとどまったが、この報告書のために発掘された家屋や土器などの実測図の作成にあたり調査員諸氏のご多忙のところ献身的に尽力された。また、このまとめに当っては、男鹿市教育委員会薄田社会教育主事の努力によって円滑に作業がすすめられた。関係者の一員として深謝する次第である。

また、この資料をもとに第二次調査へと発掘がすすめられることを期待したい。

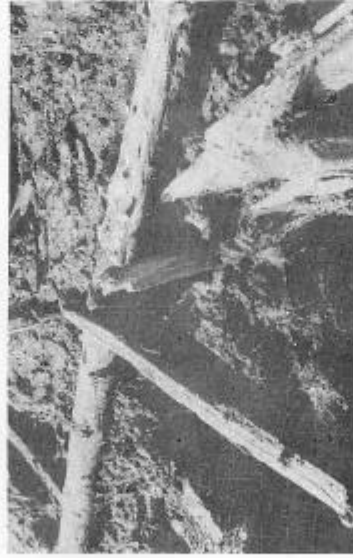
昭和40年2月末日

秋田県教育庁社会教育課文化係

図版第1図



遺跡遺景



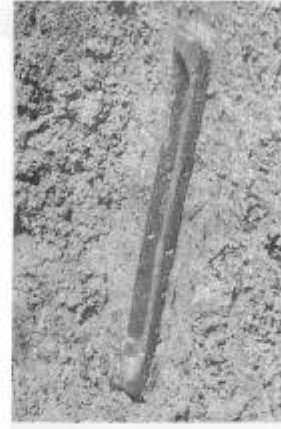
家屋遺跡の状態



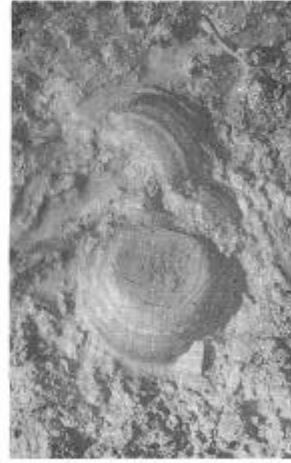
木器出土状態

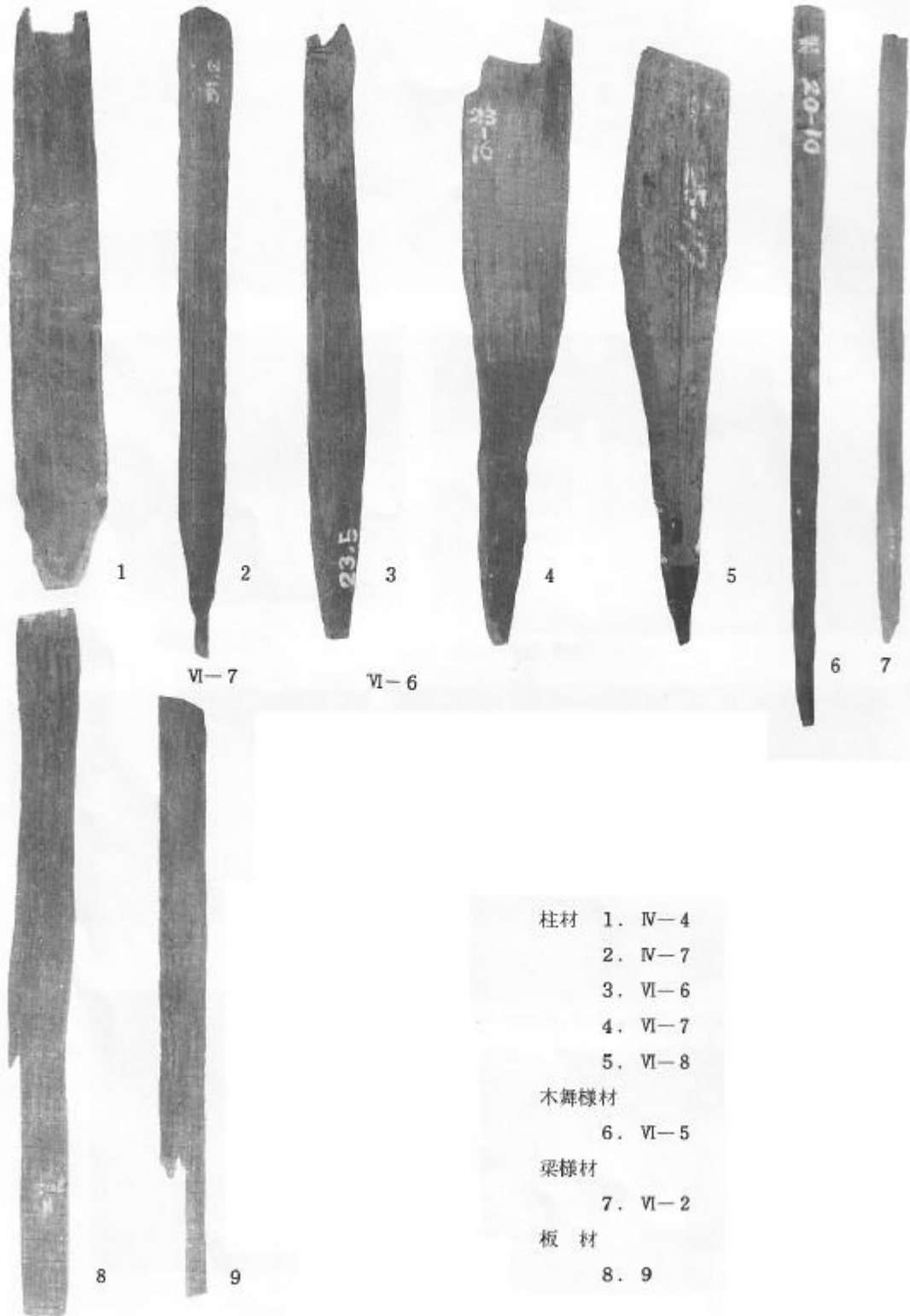


用水路側面に現われた木材



墨書土器出土状態





柱材 1. IV-4

2. IV-7

3. VI-6

4. VI-7

5. VI-8

木舞様材

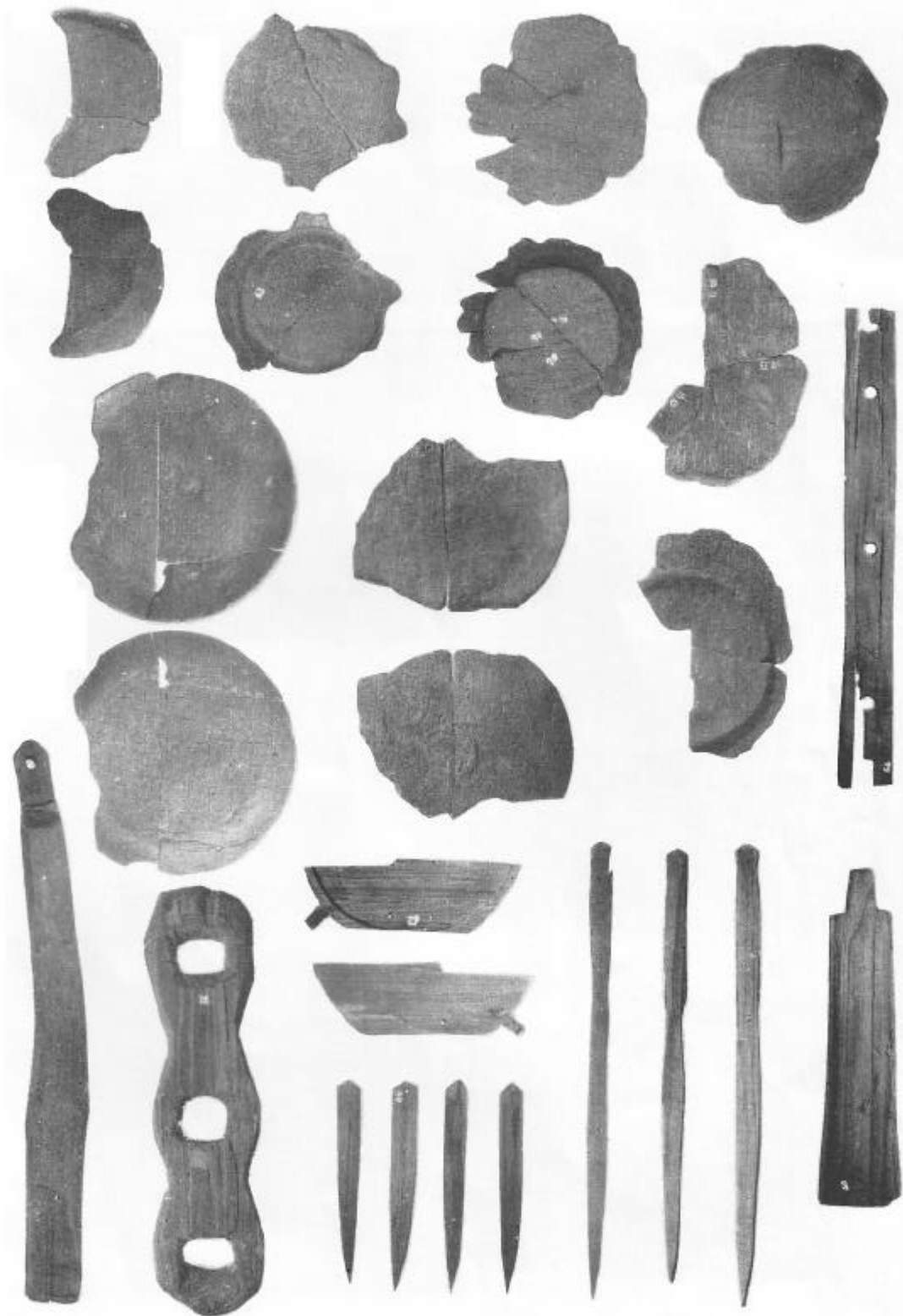
6. VI-5

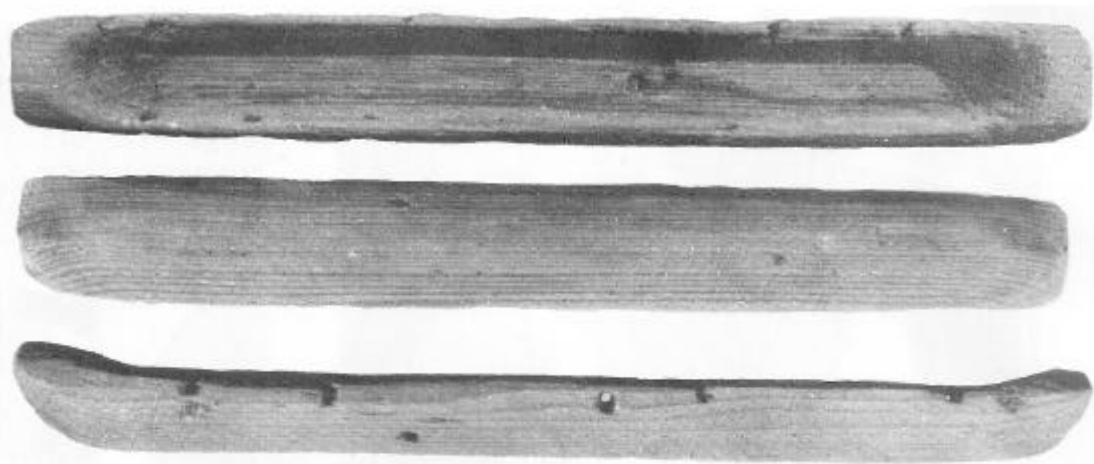
梁様材

7. VI-2

板材

8. 9





S = 2 : 1



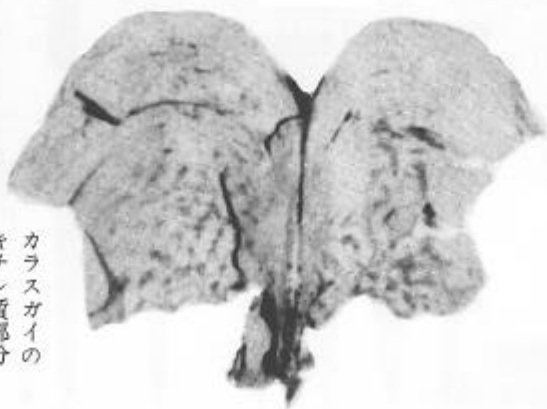
スギの小枝



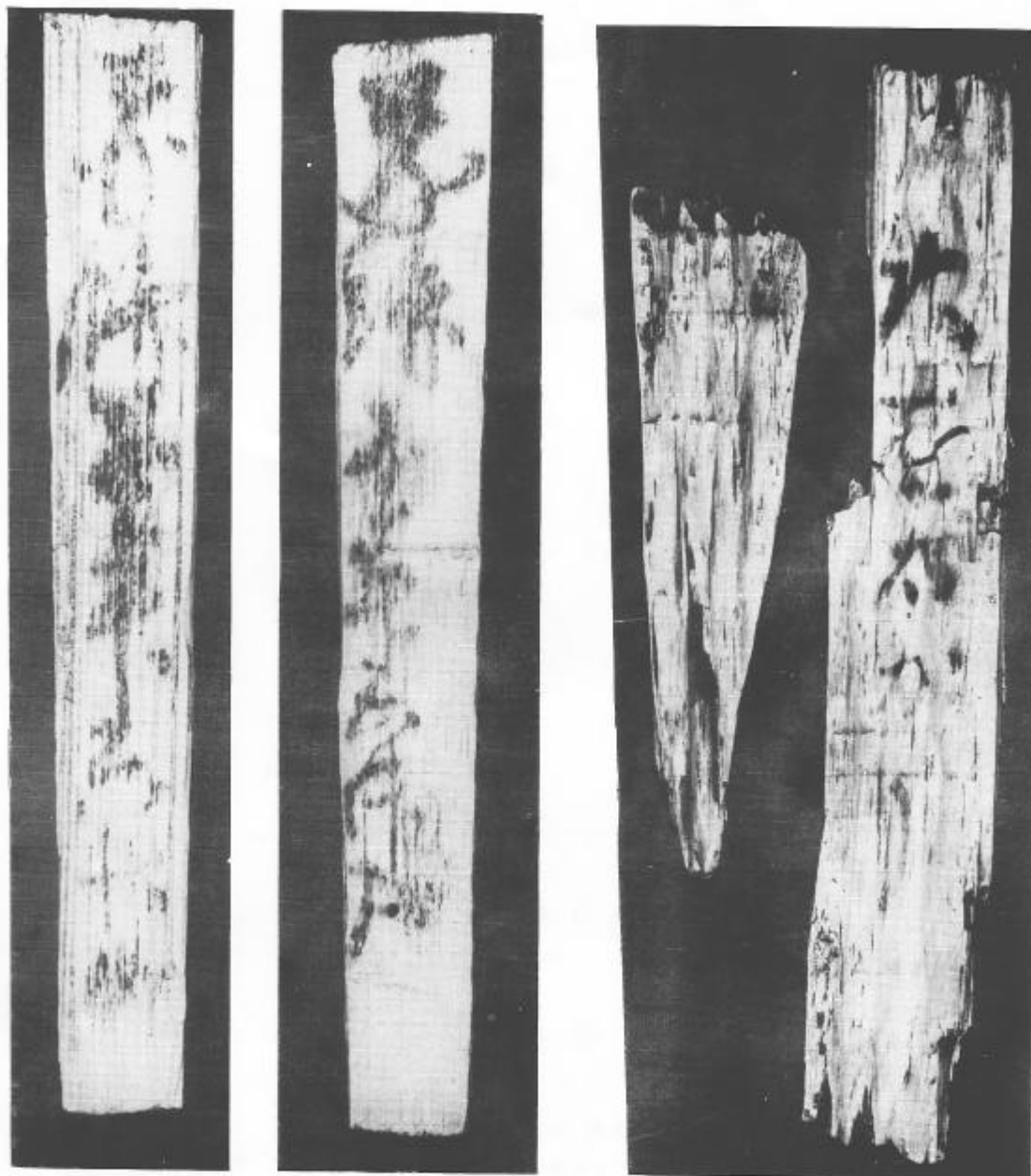
ミツラの枝



ウワミツザクラの枝



カラスガイの
キチン質部分



木簡 (赤外写真・秋田県警本部・山谷和男氏撮影)

復原長さ 35.5cm・巾 2 - 1cm 厚さ 0.7cm

長さ 14.7cm・巾 3.5cm 厚さ 0.3cm